

注) ゴシック体で記述されているものは、外部評価(学校評議員、PTA執行部及び学年選出役員)です。明朝体部分は、職員による評価です。

1 『樹木(グランドデザイン)の年輪(幹)となる教科の学習・ときめき学習・特別活動・道徳等の教育活動を実践して成果の見られた具体的な内容』

(3) 様々な人とかかわる力を付ける「特別活動」

A 異学年・異年齢による交流活動

- ・ ぼぶら集会、運動会、わんぱくタイム、清掃などにおいて、縦割り班のよさを生かした活動を組むことができ、よかった。高学年が下学年を世話し、リードする力が育ってきている。
- ・ にこにこ班での清掃活動、わんぱくタイム、ポプラ集会などの縦割り班活動の積み重ねが、確実に子どもどうしのつながりを深めてきている。特に、2年生にとって1年生は唯一の下学年で、「自分たちが面倒をみるんだ!」という使命感をもち、仲良くなりたいと思っている子が多い。学級同士での交流でも、にこにこ班が同じ子どもに特別に声を掛けたり、一緒に活動したりする姿が見られた。しかし、縦割り班活動自体が整理されていないために、子どもたちの使う名称が混乱している。「にこにこ班」「わんぱく班」「掃除の班」など。細かいことだが、せっかく年間を通してやる活動にして、子どもの意識が高まってきているので、もっと子どもたちが見通しをもって主体的に活動できるように、縦割り班の組織や年間活動を整理して子どもたちに示す必要を感じた。
- ・ にこにこ班の活動では、清掃も一緒になったことでより一層、連帯感がでてきた。毎日顔を合わせて活動することで、1年生もメンバーの顔や名前を覚えてきた。さらには、普段も6年生が教室を覗いて声を掛けてくれたり、2・3年生が昼休みに遊びに誘ってくれたりして、他学年との交流が増えてきている。上の学年の子は、下の学年を思いやったり親切にしたりする気持ちが育つと思うし、下の学年の子は、上の学年の子を敬ったり、自分が上の学年になったら真似しようという意識が育っていくと思う。
- ・ 6年生としての自覚、責任感を養うのに、これほど重要な場はないであろう。特に1年生の面倒を見ることや、集団行動の手本を示すといったことを実践できる場である。
- ・ 運動会でのにこにこ班による児童会種目では、上学年が下学年にやり方や並ぶ場所を教える姿が回を重ねるごとに見られるようになった。
- ・ にこにこ班でのダンス創作は、初めての活動であった。「ともに作り出す」活動は、上学年にはリーダーとしての在り方・進め方を学ばせる機会となり、下学年には班への所属感を持たせることができたと思う。(運動会での「よさこい」はすばらしかった。6年担任の6年児童への働きかけ、学級・学年経営のすばらしさがあったことだと思う。)
異学年を前に自分を出していくことは、上学年の子どもの中には、難しい子もいたであろうが、やりがいがあったようだ。運動会後の6年のたよりに子どもの声でそれが表れていた。2学期もダンス創作や読み聞かせなどが計画されている。これらを継続し、目的意識をもって臨めるようにしたい。
- ・ また、下学年には、リーダーシップをとったり、諸準備にあたりたりしてくれている上学年を敬う気持ちを育てていきたいものである。
- ・ にこにこ班をそのまま清掃班とした。清掃場所によっては男女や学年の配置など大変な面もあったが、子どもたちに班への所属感・連帯意識を高めることができ、有効だったと思う。何より、たてわり班が1つであるということは、1年生にも自分の班のメンバーや班長が分かりやすくよかった。
- ・ 児童の活動をにこにこ班に統一してもらったことで、1年生はとても活動しやすい。最初はぎこちなかった子も、世話をしてもらっているうちに高学年の顔を覚え、清掃やわんぱくタイムなどを楽しみにするようになった。運動会の種目練習や、わんぱくタイムの様子を見ていると、高学年も困っている低学年に声をかけることができるようになってきたと思う。
- ・ 運動会、わんぱくタイム、児童集会などのにこにこ班活動では、上学年が下学年の面倒をよくみていた。しかし、私の担当した班では、6年生が何気なしに言ったことを気にして、2年生が集会に参加しないことがあった。どうも、この二人は気が合わないらしいのだが、1年間一緒に活動するので、何とか、わだかまりを取っていききたいと思う。
- ・ 2年生は国語の授業およびその発展で、3年生は昼休みに「今日はセンオニをするから前庭へ来てください」などと誘いにきてくれている。遊びを覚えるだけでなく、温かい心が育つ。1年生にとっては自分たちの活動のとてもよいモデルとなってくれていると思う。1年生が、

- 2年、3年になったときに低学年を遊びに誘える子に育ってくれることだろう。
- 地域の異学年交流を支援する上でにこにこ班は地域を考えて編成することもよいのかもしれない。
- 縦割り班の活動では、異学年交流が進んでいると思う。1学期は、ポプラ集会、わんぱくタイム、清掃活動、運動会のよさこいソーランなどにおいて、直接かかわり合う場面が多く設定してあったことで、同じ「にこにこ班」の友達の相互理解が進んできたと感じる。今回は「よさこいソーラン」の間奏部分を班で考えて踊るという活動が大きかったと思う。みんなで考え、みんなで活動し、みんなで共感し合う体験が必要であると思う。
- すべての縦割り班活動をにこにこ班に統一して行ったことはよかった。班の中での仲間意識が芽生え、高学年は低学年を手助けし、低学年・中学年は高学年に一生懸命ついていこうとしていた。その反面、高学年の乱暴な言葉遣い、横暴な態度が見られた班もあった。思いやりの心を持つように継続的に指導していく必要がある。
- たてわり班による活動の機会が増え、6年生にとっては、最高学年として活動すべき機会が増えた。そのおかげで、最高学年としての自覚を保つことができている。また、1年生と自然に遊ぶ姿も見られた。1学期末も1年生が6年生教室に遊びに来て和やかな空間になっていた。リーダーとしては機会が増え、苦しいことも多い。このような悩みを学級会で話しあうことで、クラスで助け合い、団結力をつくることにつながっている。悩みを教師にうちあけることも多いが、子どもたちの中で話しあい解決していく機会を、これからもっと大切にしていきたい。
- 清掃のときの縦割り班で上級生の子が「こうやるんだよ」「次は、ぞうきんかけ」と、下級生をひっぱっていく姿が随所に見られた。5、6年生には下級生を引っ張ってほしいという思いを込めて厳しく指導してきた。1年生は、入学したてということもあって初めは何をしたらよいか分からない状態だったが、日がたつにつれて上級生の指示のもと、清掃に取り組んでいくようになった。今後は、特に1年生にきちんと清掃に取り組んでいく態度を指導していきたいと思う。
- 今年度は運動会での縦割り班活動が充実していた。高学年が低学年の面倒をよく見ていたと思う。気になるのは、下学年の態度である。注意しても聞かず、班長を困らせているような姿も見られた。年上の人に対する態度も指導していく必要がある。
- 個別指導学級との交流では、2人に喜んでもらおうと学級全体で意欲的に企画運営に取り組んだ。交流を終えての日記の中でも、全員が「よい交流会ができてよかった」と評価していた。しかし、交流会の企画運営はうまくいったかもしれないが、本当の意味での2人との交流ができたのかは疑問である。
2人を気遣う行動や言動が見られたのはよかった。
- 田沢小のよいところは、縦割り班がしっかりしているところだ。高学年が低学年を上から圧するばかりでなく、きちんと指導しているかどうかは分からないが、スポ少の活動を見ていると、ともに成長しているのがよく分かる。普段学校で接しているから、スポ少でもいい指示、アドバイス、フォローができるのだと思う。
- 友達を大切にしたり、学年の違う子どもたちとのかかわりをもってほしいと思う。
- 学年を越えたところで、上級生、下級生のかかわり方が、何かおかしいところがあるような気がする。具体的に言うと、上級生の下級生への面倒見がよくない。学校の中ではどうか分からないが、地域の行事などの中でも、これからもっと上級生がリーダーとなって子どもたちが自分で積極的に動くような形に持っていきたい。学校の中で、よい実践例があったらお便り等で教えてほしい。
- 縦割りの活動時間がもう少しあれば、下級生をいたわる心など、弱い者に対する思いやりがはぐくまれると思う。
- 縦割り班活動がとてもよいと思う。自分さえよければよいという子が多いが、縦割りグループだと、上の子が下の子をどうしても面倒を見るので、兄弟姉妹のいない子にもとてもよいと思う。

B 子どもの発想を生かした自主的活動

- 委員会による温度差が少なくなった。どの委員会も活発に活動している。ぼぶら集会委員の子どもたちを見ていると、今までは「計画」「準備」「リハーサル」「本番」という流れで集会を創り上げていた。しかし、今は「計画」「準備」「本番」である。前日に準備して本番を迎える機会に慣れている。指導している時間はほとんどない。それでも「ぼぶら集会委員おもしろーい」と子どもたちは言う。(I先生の指導がいいのは言うまでもない)
全校をまきこむ手だてや高学年らしい発表の仕方や聞き取れない指示など、課題は当然あるが、1学期にして自主的活動という意味合いが強いものになるとは思ってもいかなかった。子どもたちの意識の高さに驚いている。
- 一人が一つ学級のためになる仕事をする係活動のほかに、学級を楽しくする「会社」の活動を行ってきた。お笑い劇や読み聞かせ、折り紙教室など様々なイベントを自分たちで企画した。

みんなで遊ぶ機会が増え、「ふだん遊んでない男の子、女の子で遊んだ」ことが1学期一番の思い出だと話す子もいた。会社の活動を嫌々やっている様子はなく、学級の連絡黒板は常に次の活動予定で埋まっていた。

- ・ 3年生の図工で取り組んだ大地の芸術祭の取り組みが上げられる。学年全体で取り組むこともあって最初はざわついた状態で作品の下絵作りが始まった。時間をかけて、じっくりと取り組むうちに班のなかで協力する姿勢が見られるようになった。役割分担も自分たちの班で決めて下絵に取り組むようになっていった。

アン・グラハムさんとボランティアの方々が来てモザイクタイルを張る作業では、アンさんがオーストラリア出身ということもあり、初めは戸惑っていた。タイルを黙々と並べていくなかで、外国の方々と少しずつコミュニケーションを図ることができるようになった。また、班の中で自分は何をしなくてはいけないか、役割も自分自身で決め、積極的に活動に参加している姿が見られた。タイルを割ってほしいことも、身振り手振りではあったが、自分の意思を伝えている様子をたくさんの方々の場面で見る事ができた。

- ・ 運動会の内容もだんだんマンネリ化しつつあると思う。内容を子どもたちと考えたりしてはどうか。借り物競争など、子どもと見学者が一緒になっていいと思う。

C その他、特別活動に関連して

- ・ 雨の中での運動会だったが、全校児童がたくましく頑張っていたと思う。
- ・ 運動会のよさこいソーランは、続けてほしい。
- ・ 運動会はよかった。一つになったという感じがした。
- ・ 運動会はとてもよかった。
- ・ 運動会では、日頃の練習の成果を発揮し、高学年のリーダーシップとみんなの協力・団結で、とても力強い応援、きびきびした行動、雨の中での全力疾走など、とてもたくましい姿が見られた。
- ・ P T C A 作業時に、子どもたちが実に細かいところまで目を付けてきれいにしているのを見た。物や施設を大切に作る心が育っていると思う。

(4) 豊かな心・道徳的实践力を付ける「道徳」

A 心に響く授業

- ・ 資料の活用や学習過程の工夫を図り、子どもたちや参観者の心を打つ授業が試みられている。お互いに情報交換しながら子どもの心に強いインパクトを与えることができるような道徳の授業を目指して研鑽を積んでほしい。
- ・ 道徳の外部講師を有効活用するために、教師が主体で計画を立て、その中で外部教師の役割を位置づける必要があった。また事前打ち合わせの時間を設定し、細かい打ち合わせが必要だった。
- ・ 道徳的な価値観を身に付けるために副読本の活動は効果的であり、そのための年間計画も前年度立てた。しかし、あえて言いたい。副読本一本だけでは限界があり、心に響く授業を行うにはあまりにも脆弱であると。そこで、年組では、しっかりと価値観を身に付けさせたいときには副読本を利用し、心に訴えたい場合には市販の教材を利用した。特にI先生お勧めの明治図書から出版されている道徳の授業シリーズは、現実にあった具体的資料が生かされていることや、導入が子どもたちの立場からスムーズに入りやすく設定されていることなどで、子どもが本音を出して考えさせられる授業になっている。また、T先生のクラスでは、学校図書を教材として有効に利用しているようだ。全体的に読書が好きな田沢小学校の子どもにとって、図書の活用は子どもを大いにひきつける。
ここで、提案と言うかお願いなのだが、昨年度立てた副読本を基にした計画以外の道徳授業をされた方は、教具や資料、できれば授業方略なども簡単でもいいので残しておいていただくとありがたい。来年度以降も使えるのだから。
- ・ 体験的な道徳活動を重視する上でときめき学習と道徳との関連を考えて実施することが大切だと思う。3年生は、地域の魅力を互いに話し合う活動を通して郷土愛を主題とした道徳のねらいに迫っていかうと考えて実践した。他の徳目も体験を取り入れて計画していきたい。
- ・ 毎週、教科書によるおきまりの道徳授業を展開した。教科書を読み、そのときのテーマに沿って発表したり、文章にまとめたりした。しかし、明らかに他の授業と顔つきが違い、目の輝きがないのである。あせっていたときにI先生の『命の授業』が目にとまった。同じ授業をしても3年生は理解できないので、更に工夫して授業を展開した。テーマを言わないで最後に「今日は何の授業だったでしょう。」と聞いた。『命、人の心』と答えた子どもが9割以上だった。今までの道徳授業が悪いとは言わないが、子どもの食いつきが違うのは歴然であった。
- ・ 副読本で4月から指導計画通りに道徳をやった。小学生にして、居眠りをしている子どもが何人もいた。他の教材を読んでいる子どもが何人もいた。「ここでの気持ちはどうだったんだろう？」という問いかけに対して子どもたちは、拒否反応を示した。道徳は私の説教の時間に

なった。

それから副読本を捨て、自分で教材を選定した。子どもの心をつき動かす教材と発問により構成された授業をどんどん取り入れた。「命」「人権」「環境」「真実」という大きな価値で分け、子どもたちの実態に合わせて授業をした。イラク戦争の時は、戦争の醜さを扱った。修学旅行の前には、児童労働の実態を扱った。クラスがぎくしゃくしたら、「とべないホタル」を教材にした。クマが出たら「環境」の授業をした。自殺のニュースが出たら「命」の授業をした。

学年道徳も行った。障害のある人に対する対応の仕方を学年で考えさせた。サリドマイド児の「こずえさん」のドキュメントを涙を流しながら見た。「日本は老人にとって気の毒な社会である」という討論を1学期末に行った。

自分で選定した教材で授業した方が子どもは食いつく。心が動いているのが分かる。1週間に1回当たり前のように道徳を行い、価値項目すべてを浅くさらっていく道徳がいいのか、それにとらわれず、実態に合い、子どもの心情に訴える教材を選択し取り組むことがいいのか。それは、子どもの姿が証明していると思う。

- ・ 命の大切さを子どもに教えていただき感謝している。今の子どもたちは、ゲーム感覚で殺人などをしてしまうような気がするので、ゲームと現実は違うんだ、命は一つしかないんだということをしかりと教えていただきたい。
- ・ 勉強のできる子どもに育てたいのはどの家庭も同じ。が、今、社会では子どもたちをめぐる凶悪な犯罪が多く発生している。命、人間の尊厳、人間の愚かさをもっと教えてほしい。家庭での教育が第一であるが、子どもたちが同じ時間に同じ場所で学ぶことの方が有効であると思う。先日の6年の道徳は、テーマが「命」とタイムリーであった。さらに深めてほしいと思う。
- ・ 道徳授業が増えたなと思う。気持ちの面でもすごく成長する時期なので、大切な時間だと思う。

B 自然や人々とかかわる活動

- ・ Fさんを講師に招いての授業が行われた。私たちも初めてのことであったので、事前の話し合いが綿密にできなかった。2学期もう1度あるので連絡を密にしたい。
- ・ Fさんの人柄がすばらしく、それだけでも子どもたちと触れ合っただけで価値がある。「Fさんが、田沢の子どもはすばらしい、と始めに言ってくれたのが、とても嬉しかった。」ある子どもの感想シートより。
- ・ ときめき学習の複数回、複数の施設で交流したことの良さが明らかになった。

C 温かい人間関係づくり

- ・ 高学年になったら、机上の道徳だけでは、だめである。男女間の格差や、発達格差が目覚ましい。この発達段階では、「体験的な道徳？」が必要不可欠である。構成的エンカウンター、五色百人一首（男女があたりまえのように手を触れ合い、わきあいあいとなる）、簡単なプロジェクトアドベンチャー（P・A）的な活動を行うと良いことがわかった。活動前は、ぎくしゃくしているが、気付いたら男女が全く気にせず手をつないでいるということが見られた。
- ・ どこのクラスでも行っているエンカウンターが効果的。いいネタがあったら、これもどんどん広めていきたい。あと、男女仲を良くする「五色百人一首」も素敵だ。
- ・ グループエンカウンターを取り入れ、学級の人間関係作りに取り組んできた。児童はゲームをするような感覚で、楽しみにしている。このためかどうかは分からないが、以前と人間関係に変化が見られる。これまで一人でいることが多かった女の子が、女子のグループと遊ぶ姿が見られるようになった。まだうまく友達の中に入っていけない子がいるので、今後も続けていきたい。

D 同和教育・人権教育の推進

- ・ 学年目標「みんななかよし」との関連で学校生活全体を通して取り組んでいる。全員が友達を増やし、学校や教職員と言葉を交わせるようになった。
- ・ 2年生では、道徳の時間を使って、「差別を許さない」同和教育を行ってきた。子どもたちの身近に起こり得る差別事象を取り上げた資料をもとに、「自分ならどう感じるのか」「どう行動するのか」を考え、自分の問題として解決しようとする心と実践力を育てることを目指してきた。普段の子どもたちの様子を見ると、春の頃に比べ、特定の子どものみを排除するような言動が減っている。また、差別的な言動が見られたときに、それに気付き、正そうとする姿が見られるようになった。
- ・ 特にいじめについてであるが、ダブルブロックで行ってきた。
 - 1 いじめを生まない集団作り
 - 2 いじめの芽をすばやく摘み取る